JSCS LETTER

No. 5

Japanese Skin Cancer Society news letter

一般社団法人 日本皮膚悪性腫瘍学会 JSCS Japanese Skin Cancer Society

●一般社団法人日本皮膚悪性腫瘍学会

http://www.skincancer.jp/index.html

2019/04/15

理事長挨拶【尹　浩信（熊本大学大学院皮膚病態治療再建学分野）】

今年度の日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会(5月24日-5月25日)は神戸で開催されます。錦織会長をはじめ神戸大学大学院皮膚科学分野の皆様には大きなご負担をおかけしますが、どうぞよろしくお願い致します。

今年度の学会のテーマは「皮膚がんの先制医療と高齢者での治療の限界のギャップを埋める」でありまして、高齢化社会における皮膚がんに対する取り組みに関して様々な議論が出来るのではないかと楽しみにしております。また「高発がん性遺伝病」「高齢者における皮膚がん治療」「precision medicine」などをテーマとしたシンポジウムもあり、皮膚悪性腫瘍に関して幅広く学び、議論できる場になるのではないかと期待しております。皮膚悪性腫瘍に関する基礎研究、臨床研究の一般演題も増えたと伺っております。好ましい傾向であると考えております。

日本皮膚悪性腫瘍学会賞も広く認知され、毎年皮膚悪性腫瘍に関する優れた論文を表彰できるようになりましたので、今年度の学術大会でも初日の昼の参加者が多い時間帯にplenaryで講演していただくようにお願いしております。

学会活動としては、加藤先生を委員長とする皮膚がん予後統計委員会が、新しい臨床研究の指針に基づいて、皮膚悪性腫瘍に関する調査を続け、貴重なデータを蓄積し、英文論文にて次々に発表しています。皮膚付属器腫瘍に関する調査も安齋先生を中心とするワーキンググループが進めています。皮膚悪性腫瘍診療ガイドラインの改訂も菅谷先生を委員長とする委員会によって順調に進んでいます。

今後とも日本皮膚悪性腫瘍学会は若手医師の皮膚悪性腫瘍に関する教育を担い、皮膚悪性腫瘍に対する治療水準の向上に貢献するとともに、国民の福祉に貢献し、これらに携わる医師の研究の向上を図ることにより、皮膚悪性腫瘍の診療に関する学術及び技術の振興並びに公衆衛生の向上に寄与していきたいと考えております。皆様の益々のご協力をどうぞよろしくお願い致します。

学会の現況

2018年度会員状況
（平成31年4月15日現在）

会員数	
一般会員	1,406名
賛助会員	東レ㈱・マルホ㈱・(株)ミノファーゲン製薬 ノバルティスファーマ(株)
名誉会員	22名
功労会員	40名
合　計	1,472名

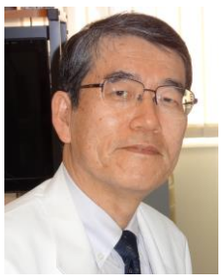
第35回学術大会の御案内【錦織　千佳子（神戸大学大学皮膚科）】

このたび、令和元年(2019年)5月24日(金)-25日(土)に、神戸国際会議場に於いて、第35回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会を開催させて頂くことになりました。テーマは“皮膚がんの先制医療と高齢者での治療の限界のギャップを埋める”として、“予防・攻めの先制医療”が進む一方、合併症や全身症状に応じて対応せざるを得ない現状で“高齢者の治療：あなたならどうする”というテーマ演題を設けて症例を深く掘り下げて検討する機会を持てればと思います。

特別講演には米国国立がん研究所の小林久隆博士に、“がんの近赤外光線免疫療法”のタイトルで先進的な非侵襲がん治療についてご講演を賜ります。教育講演1では“PD-1阻害がん免疫治療の最前線”として、がんによる免疫逃避機構との戦いについてご講演賜ります。メラノーマの治療薬が増えるとともに、様々な作用機序をもつ悪性腫瘍治療薬の副作用に対するタイムリーなキメの細かい対応が必要になってきました。そこで、教育講演3では“押さえておきたい皮膚悪性腫瘍エッセンス”として悪性腫瘍治療薬の副作用対策を含めて我々が知っておくべき知識をコンパクトに整理してご講演頂きます。皮膚科医の悪性腫瘍への関心の高まりを反映して演題数222題と、非常に多くの演題を登録頂きましたこと、この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。がんの治療は、がんの特性に応じた治療薬の選択、宿主の治療薬への反応性の制御など、“宿主とがんのせめぎあい”をいかに我々にとって良い状況にコントロールするかが治療のゴールと言えます。本学術大会がその最適な解を見つける一助になればと思い教室員一同鋭意準備を進めて参りました。

神戸の5月は爽やかな新緑の六甲山をバックに山風と浜風が吹いて大変清々しい季節です。一人でも多くの学会員が神戸の地で熱くdiscussionできることを願っております。教室員一同、皆さまのお越しを心よりお待ち致しております。

第36回学術大会の御案内【山本明史（埼玉医科大学国際医療センタ-皮膚腫瘍科・皮膚科）】



まさに2020年東京オリンピック・パラリンピック開催の年に、その直前の7月3日（金）－4日（土）に浅草ビューホテルにて、第36回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会を開催させていただくことになりました。ふり返れば、1985年（昭和60年）に第1回日本皮膚悪性腫瘍研究会が東京で産声をあげ、第3回から学会に成長し、来年でちょうど35周年を東京で迎えることになります。

私はこの間、すべての学術大会に参加し、日本の皮膚悪性腫瘍に対する診療・研究に携わってきました。昨今の当分野の進歩もめざましいものがあり、停滞していた昔の長い時代がうそのように感じられます。そこで、今回のテーマは、皮膚がん診療の新時代を拓く」と題して、最近の進歩を踏まえた新しい時代を拓く機会にしていただきたいと期待しております。浅草は、浅草寺やスカイツリーなど観光のにぎやかな楽しい街で、来年はさらに活気づいていることと思われます。それでは、2020年東京浅草で、活発な議論をよろしくお願い申し上げます。

雑誌委員会

委員長：奥山　隆平（信州大学皮膚科）

2018年から、渡辺晋一先生の後任として雑誌委員会の委員長を務めています。雑誌委員会では、日本皮膚悪性腫瘍学会の学会誌であるSkin Cancer誌を年3回発行していますが、Skin Cancer誌は渡辺晋一先生の尽力によって2015年以降、紙媒体から電子化に移行しました。電子化によって過去の論文にアクセスしやすくなり、世の中へのインパクトも増しているのではないでしょうか。また、Skin Cancer誌は日本皮膚科学会の専門医取得のための実績単位にも認められており、その点でも意義深い学術誌です。

現在、皮膚腫瘍の領域では新規の薬剤の上市も続いており、診療はダイナミックに変動しています。日々の診療で出会った有意義な症例がありましたら、投稿をご検討下さい。また、会員の方々の研究プロジェクトや総説を世の中に問う際にも、適した学術誌です。Skin Cancer誌は皆さんの学術誌です。皆さんの尽力で、是非ともSkin Cancer誌をより大きく育てていただければと思います

連携委員会

委員長：山﨑　直也（国立がん研究センター皮膚腫瘍科）

連携委員会の委員長を務めております国立がん研究センター中央病院皮膚腫瘍科の山﨑直也です。

連携委員会は私を含め5名のメンバーで構成されています。大阪国際がんセンター腫瘍皮膚科・爲政大幾先生、愛知医科大学皮膚科・渡辺大輔先生、静岡県立静岡がんセンター・吉川周佐先生と私の同僚である国立がん研究センター中央病院の並川健二郎先生です。

現在のように医学の多くの分野が細分化され、それぞれに専門的な集団となる学会がたくさん生まれている時代において、各学会や他のさまざまな組織とうまく連携を図ることによって日本皮膚悪性腫瘍学会の活動が広く認められたり、学会がより良く発展する基盤となることが考えられます。

最近の連携委員会の活動のひとつとして認定NPO法人キャンサーネットジャパンが毎年夏に開催するジャパンキャンサーフォーラムへの共催参加が挙げられます。このフォーラムでの講演を通じて一般市民の方々に悪性黒色腫をはじめとする皮膚悪性腫瘍に対する最新の正確な情報を提供することを試みておりますが、希少がんである皮膚悪性腫瘍の有益な情報に対するニーズは非常に高く、毎年好評をいただいております。

もうひとつ重要なものとして日本皮膚悪性腫瘍学会の悪性黒色腫（メラノーマ）薬物療法の手引き作成委員会による「悪性黒色腫（メラノーマ）薬物療法の手引き version1，2019」の公開があります。2019年春公開予定ですので皮膚悪性腫瘍学会のホームページ上に公開後は日本皮膚科学会にお諮りし、日本皮膚科学会のホームページとリンクする手続きをすすめて参ります。

皮膚悪性腫瘍学会は、いわゆる“皮膚がん”から軟部肉腫、悪性リンパ腫といった非常に多くの腫瘍を対象に診断、治療、緩和ケアまで広い範囲をテーマにできる学会ですのでより魅力のある議論ができる連携の輪をいくつも作れるよう努めていきたいと思います。

事務局より

Skin Cancerの電子投稿について

かねてより要望の多かった学会誌Skin Cancerの電子投稿が可能となります。2019年5月24日（学術大会初日）に新しい投稿規定が学会ホームページに公開されます。Skin Cancerは電子ジャーナルであることから電子投稿を可能とし、査読に関しましてもメールで実施可能とすることが決まりました。これに伴い、原則的に紙ベースでの投稿はできなくなりますのでご注意ください。原稿の送付先はメール添付でSkin Cancer編集部宛に送付していただくことになります。送付先メールアドレスはこちらです。skincancer.toukou@rinsyo-iyaku.co.jp

メラノーマ薬物療法の手引きversion1.2019の公開

近年続々とメラノーマの新薬が開発され、診療アルゴリズムも数ヶ月単位で変更されております。日本皮膚科学会悪性黒色腫（メラノーマ）薬物療法の手引き作成委員会では、2016年夏に「悪性黒色腫新規薬剤に対する治療の手引き（version 1，2016）を作成・公開しました。その後も新規薬剤の承認に対応し、2017年に改訂が行われましたが、今回新たにニボルマブとイピリムマブの2種の免疫チェックポイント阻害薬の併用療法と、新たな低分子性分子標的薬であるBRAF阻害薬エンコラフェニブとMEK阻害薬ビニメチニブの併用療法の承認を受けて薬物治療戦略を見直し、改訂版（version 1，2019）として公開することとなりました。ホームページからダウンロードできます。新規治療薬のより効果的かつ安全な使用を目指すためにも、本手引きをご活用ください。

（文責）事務局　福島　聡

編集・制作
(社)日本皮膚悪性腫瘍学会
広報委員会